反核医師ジャーナル

第62号　発行：核戦争に反対する医師の会・愛知

2010年10月５日
vol.29　No.2

（名古屋市昭和区妙見町19－2
愛知県保険医会館気付
TEL052－832－1345）

核兵器廃絶に向け「核の傘」からの離脱を

「核兵器のない世界を」国際署名は、全国で六百九十万筆集められ、カバクチュランNPT再検討会議議長に届けられた（写真上）原水爆禁止世界大会・広島閉会総会・八月六日（写真左）

原水爆禁止世界大会・広島「広島からのよびかけ」（抜粋）

◉「核兵器のない世界を」署名をはじめ、国民の声を結集し、世界の諸国民と連帯する多彩な行動を発展させましょう。

◉アメリカの「核の傘」からの脱却を日本政府にせまりましょう。「核密約」の破棄、「非核三原則」の厳守と法制化、「非核神戸方式」の普及・拡大、「非核日本宣言」の運動をさらに発展させましょう。

◉被爆の実相をさらに解明し、これを学び、世界にひろめることは核兵器廃絶条約を求める世論を強め、「核抑止力」論を打破するうえでも決定的に重要です。被爆者の体験と思いを聞き取り、映像・活字などあらゆる形で記録して、発信・普及・共有していく運動を、「人類的な事業」としてくり広げましょう。

５月のＮＰＴ再検討会議ニューヨーク行動に参加した、反核医師の会代表の４人。右から中川武夫事務局長、徳田秋世話人、土井敏彦事務局次長、澤田和男協会事務局次長

反核医師の会28周年記念講演会

Let Us Be Midwives!

産婆になりましょう

詩人が語る―核兵器廃絶と憲法の力

アーサー・ビナード氏（詩人）

核戦争に反対する医師の会・愛知は、五月二十二日（土）の午後、保険医協会伏見会議室で二十八周年記念講演会を開催。医師や市民ら百人余りが参加した。講演の要旨を紹介する。（文責：編集部）

原爆投下と"核持ちクラブ"

アメリカでは、広島と長崎への原爆投下について「大勢の人命を救うための正義の投下」と説明され、この「定説」を国民も信じてきた。

しかし戦後五十年経ち、米国情報公開法に基づき当時の資料が公開される中で、七月には日本側から戦争終結を模索する動きがあったことが分かっており、話し合いで解決する道を無視して原爆を投下したことは間違いない。原爆を製造させた人たちは、製造へ投じた膨大な費用を、国民に知られると政治生命に関わる問題であり、同時にその軍需産業による利益をいつまでも手放したくない人たちにとって、原爆の投下は「正義の投下」であり、その「定説」が必要だった。

NPT問題でも、最悪の終末を避けるためには、核兵器廃絶しかないのに、なぜぐずぐず引き延ばしして廃絶の方向にまっすぐ向かわないのか。理由は、"核持ちクラブ"（核保有国）が儲かる道を手放したくなくて長引かせているからだ。

しかし、すでに"国防"や"抑止力"のベールも薄くなってきて、修正に修正を加えても、もうメインテナンスが効かなくなってきている。

アーサー・ビナード氏

詩人、絵本作家、随筆家、翻訳家、ラジオパーソナリティなど広範に活躍。日本在住。

アメリカ・ミシガン州生まれ。20歳でヨーロッパに渡り、ミラノでイタリア語を習得。ニューヨーク州コルゲート大学英米文学部卒業。大学で日本語にふれ1990年来日。日本語による詩作、翻訳を始める。

主な著作に詩集「釣り上げては」（中原中也賞）、エッセイ集「日本語ぽこりぽこり」（講談社エッセイ賞）、「日々の非常口」（新潮文庫）、絵本「ここが家だベン・シャーンの第五福竜丸」（日本絵本賞）など著書・訳書多数。

アメリカは「怒っている」か？

沖縄の基地問題について、日本では「アメリカが怒っている」と政府もマスコミも騒ぐ。このアメリカとは一体誰のことか？

アメリカは世界百三十カ国に基地を置いており、その中で沖縄は何も特別ではない。アメリカ人は日本の沖縄にどんな米軍基地があるかなんて知らない。マスコミが載せないし、関心もないからだ。だから、普通のアメリカ人は誰も日本の基地問題で怒ってなんかいない。

逆に、アメリカ人は国防総省や莫大な軍事費のムダ遣いに怒っている。オバマ大統領になってから民間保険を使った名ばかりの「国民健康保険」ができたが、誰もが公平に受けられる健康保険ではないので、そのお金を医療保険に回せと要求している。

日本人がアメリカで米軍基地の事実を知らせれば、理解し合えるはずだ。日本政府のやるべき本当の仕事は、普天間基地の移転問題の真実をアメリカの国民に向かって知らせることではないか。

ペテンを見抜く力を

五月六日のロサンゼルス・タイムズにチャルマーズ・ジョンソン氏（日本政策研究所所長・国際政治学者）が、日本の米軍基地問題や普天間基地がアメリカの基準に照らしても反している、極めて危険な実態を正確に知らせ、「普天間基地を即返還すべきだ」という記事を書いた。ところが、日本のマスコミはそれには注目せず、鳩山首相の「ルーピー（クルクルパー）」記事にすり替えた。議論を低い次元に引き込むための役割を果たしている。

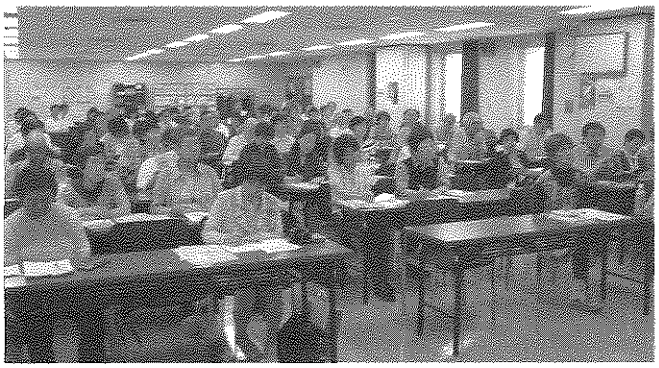
専門家は問題解決のために働いていると思われているが、実際はどうだろうか。

一九九五年に起きた沖縄米兵少女暴行事件を機に、もう我慢ならない問題として「基地返還」の声が大きくなった。けれど、それが専門家の手により「基地移設問題」にすり替えられ、「返還」がなくなった形でずっと議論されてきた。

専門家中の専門家であるアメリカの物理学者スティーヴン・ワインバーガーは、「専門家」と

言われる人々について、『専門家』は、"小さな失敗"を器用に回避しながら、"大きな失敗"へと国民を導く」と言っていて、この定義は現状を極めて正確に表現していると思う。問題解決のためには「専門家」ではない、私たち市民の動きがカギを握っている。

第五福竜丸の勇気



一九五四年三月一日、第五福竜丸はマーシャル諸島ビキニ環礁でアメリカの水爆「ブラボー」の実験に遭い、死の灰を浴びて二週間後の三月十四日焼津に帰った。その半年後、無線長の久保山愛吉さんが亡くなった。私は日本に来て第五福竜丸が保存されていることを知ったが、不思議でならなかった。なぜ第五福竜丸は帰還することができたのか？

アメリカ人である僕の常識では、あり得ない話しだ。ビキニで初めての水爆実験で被曝した第五福竜丸は、アメリカにとって知られてはならない国家機密を知ってしまった船であり、口封じのために消されるのが普通のはずだ。ところが、漁船員たちは放射線を浴び放射能症を発症しながらも生きて帰って来た。なぜ生きて帰ってこられたのだろう？

無線を打てば沈められる
―隠密裏に焼津へ帰還の航海

調べて解ったことは、久保山さんは船員たちに「飛行機か船が見えたらすぐに知らせろ。そうしたらすぐ無線を打つ。何も来なければ無線は打たない」と伝え、米軍に見つからないように焼津をめざした。久保山さんは戦争中通信兵をしていた経験で、焼津に無線を打てば米軍に自分たちの位置を知らせることになり、すぐに攻撃されて沈められると分かっていた。だから、沈黙を守ってうまく逃れられたのだ。彼らは被曝の証拠品である「死の灰」等もビンに詰めて持ち帰った。そして、それを科学者たちに渡し、自分たちが水爆実験に遭遇したことを認めさせた。

その後、アメリカとそれに従う日本政府は、死の灰を浴びながらも生きて焼津に帰って来たこの勇気ある第五福竜丸の二十三人の漁船員たちを、"かわいそうな"犠牲者に仕立て上げ過小評価することで、日本と世界の人々の記憶から消し去ろうと狙った。しかし本当は、彼らの行動は水爆実験の生き証人であることを立証するために闘って、アメリカ国防総省に勝った勇気ある人々の物語のはずだ。

私はこの事実を、子どもの頃から好きだった画家ベン・シャーンがかつて描いていた「第五福竜丸」の画に組み合わせて絵本にまとめた。それが『ここが家だ―ベン・シャーンの第五福竜丸』（集英社）だ。

生ましめんかな

栗原　貞子　詩

こわれたビルディングの地下室の夜だった。
原子爆弾の負傷者たちは
ローソク一本ない暗い地下室を
うずめて、いっぱいだった。
生まぐさい血の匂い、死臭。
汗くさい人いきれ、うめきごえ
その中から不思議な声が聞こえて来た。
「赤ん坊が生まれる」と言うのだ。
この地獄の底のような地下室で
今、若い女が産気づいているのだ。
マッチ一本ないくらがりで
どうしたらいいのだろう
人々は自分の痛みを忘れて気づかった。
と、「私が産婆です、私が生ませましょう」
と言ったのは
さっきまでうめいていた重傷者だ。
かくてくらがりの地獄の底で
新しい生命は生まれた。
かくてあかつきを待たず産婆は
血まみれのまま死んだ。
生ましめんかな
生ましめんかな
己が命捨つとも

みんなで果たそう「産婆」の役割

広島で被爆した詩人の栗原貞子は『生ましめんかな』の詩で、被爆の夜、暗闇の地下室で、瀕死の自分の命に換え赤ん坊を産ませて死んだ産婆を描いた。これには、原爆にさえも怯まない人間の力強い優しさ、生命を生ませる、繋げるという力が描かれている。この詩はミシガン州立大学で『Let Us Be Midwives』と英訳され、彼女の分厚い詩集の中に入っている。

私たちは、ひと握りの人々の儲けのために騙されるのでなく、私たちみんながこの産婆のように、真実を知り命と平和のために語り行動する人になろう。

ニューヨークで核廃絶訴え
反核医師の会代表団ＮＰＴ報告
２０１０・５・１～５

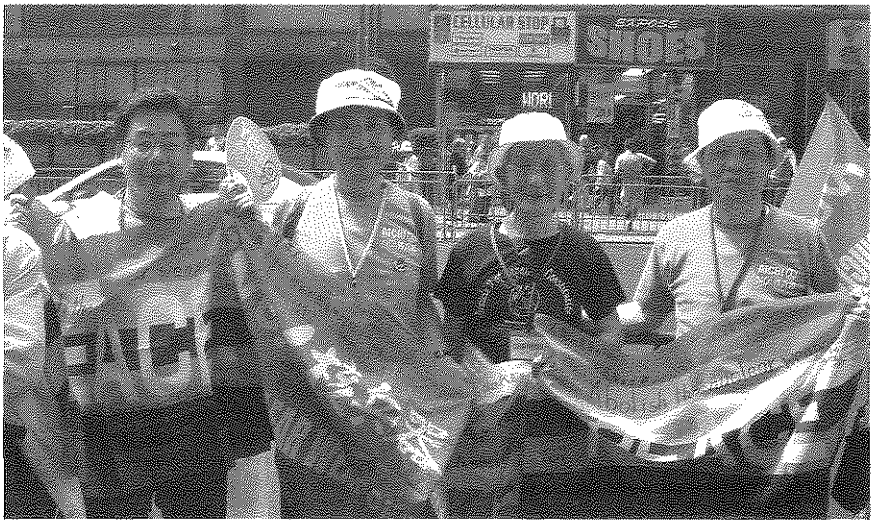
国連で開かれるＮＰＴ再検討会議にむけたニューヨーク行動に、愛知県保険医協会および核戦争に反対する医師の会から四人を代表派遣した。

再検討会議開会日前日の五月二日に取り組まれた国際共同行動には、日本から千五百人、愛知県から百三十人が参加し、総勢一万人を超える参加者がマンハッタンで、署名宣伝・集会・パレードを繰り広げた。

国連本部近くのパレード終着地点ハマーショルド広場には、日本から運ばれた六百九十万筆を超える「核兵器のない世界を」署名が山積みされ、カバクテュランNPT再検討会議議長とドゥアルテ国連上級代表に託された。

カバクテュラン議長は、翌日の開会総会で「私は昨日、署名を受け取りました。核兵器廃絶にむけた市民社会の熱意に私たちは応えなければならない」と発言。

代表団は、ニューヨーク滞在中、愛知県代表団交流会、ピースコンサート、公開シンポジウム、医療・福祉関係者のつどい、反核医師の会交流会などの行動に精力的に参加した。



愛知県内の医師・歯科医師から核兵器廃絶の願いを寄せ書きに託されてニューヨーク行動に参加した反核医師の会の代表４人

過去最高の協力に感謝

代表派遣にあたっては、愛知県保険医協会および核戦争に反対する医師の会から、国連に提出する五千五百八十九筆の署名と、代表派遣募金五十七万八千円の協力が寄せられた。

いずれも過去最高の協力となり、代表派遣された四人を先頭に、今後、核廃絶の運動を推進することで、ご協力いただいたみなさまへのお礼としたい。

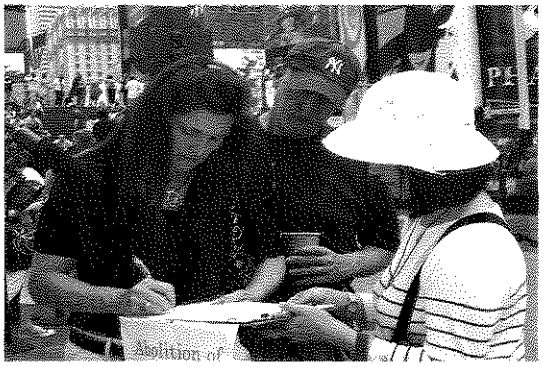
タイムズ・スクエアで署名と「国際行動デー」パレード

徳田　秋

五月一日夜、宿舎のホテルを目の前にしながら、対テロ警戒の道路封鎖に遭って、空港から乗ったバスの中に三時間近くも足止めされたので、就寝は三時過ぎになりました。

翌二日は「国際行動デー」。午前中は署名に出ました。ニューヨークの繁華街、タイムズ・スクエアの一角にあるチケット・センターの付近は、ミュージカルなどのチケットを買う人が長い行列をつくっていて、その傍らにはテーブルを囲んで話し込んでいる人たちもいました。

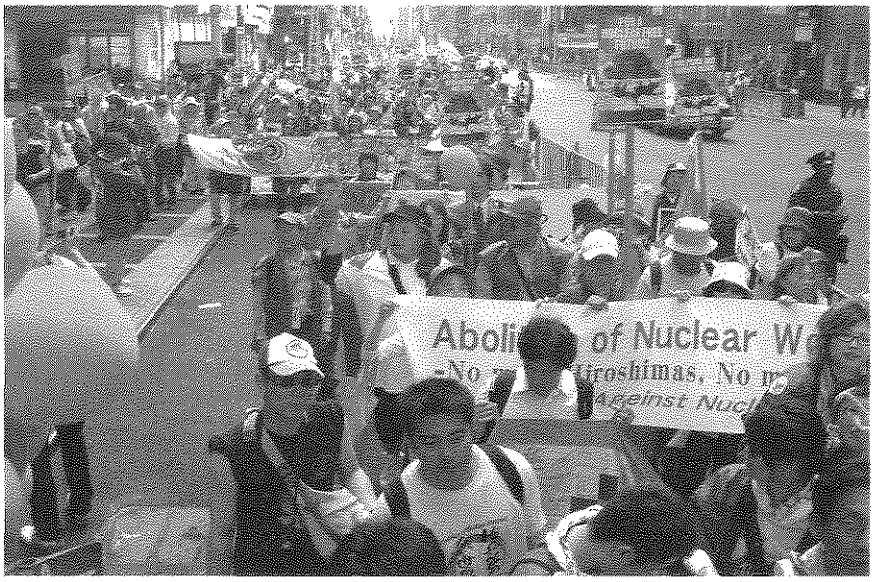
数人に声をかけましたが、すでに他のグループが済ませたらしく、ほとんどが「先刻署名した」と答えるので、仕方なく通りかかる人たちを対象にしました。土井先生がしきりに声を張り上げて呼びかけられるので、私はその脇に立って、もっぱらアイ・コンタクトを試みました。



核廃絶署名をするニューヨーカー　ニューヨークの繁華街、タイムズ・スクエアにて

路上に並べた被爆者の写真を熱心に見ていた女性が、つかつかと近寄って署名してくれましたが、この人はドイツから来た女医さんでした。視線が合って署名に応じてくれたアメリカの青年は、ナゴヤと聞くと目を輝かし、南山高校に在学したことがあると話してくれました。

午後はそのタイムズ・スクエアから七番街を少し南に下がった四十二丁目へ行きました。車道を半分塞ぐ形にステージが作られていて、壇上には共同代表の一人・澤田昭二氏の姿があり



タイムズ・スクエアから国連本部前まで１万人が大行進

余り。平和と核廃絶の世論がここまで高まっていることをひしひしと感じました。特に若い人の参加が多いことは喜ばしい限りです。

薄曇りだが気温はそれなりに高く、ステージが遠いのでスピーカーの名前もほとんどきき取れず、正直なところ少々退屈で辛い時間でした。それが延々二時間もつづいたので、参加している高齢被爆者が心配になって来ました。

総勢一万人の行進がようやく動きはじめました。五年前ほどの威勢はなく、粛々とした行進でした。五年前はイラク戦争反対でアメリカ中が沸き立っていたが、今は沈静化していることは後で聞きました。

国連本部前のハマーショルド広場で行進は終りましたが、ここでカバクテュランNPT再検討会議議長とドゥアルテ国連上級代表に六百九十万千三十七筆の署名が提出されました。

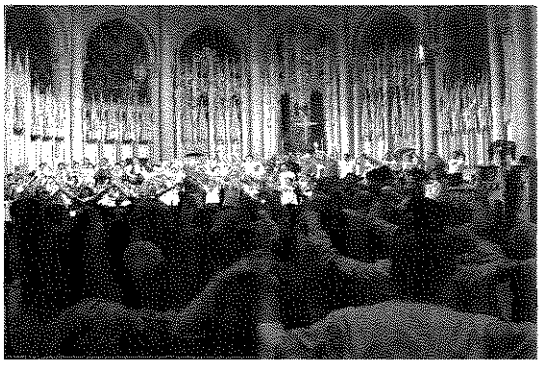
リバーサイドチャーチでのピースコンサートと公開シンポジウムに参加

土井　敏彦

ニューヨーク二日目は、午前中、専門ガイドの案内で市内観光。少しアメリカとニューヨーク・マンハッタンを理解して、午後からは、リバーサイドチャーチで行われる、ピースコンサートと公開シンポジウムに行く。この教会は、マルチン・ルサーキングがベトナム反戦の演説をした、また、ネルソン・マンデラが釈放後の初訪米でスピーチを行った、ゆかりの教会とのこと。リバーとは、飛行機の不時着で有名になったハドソン川のことである。なかなか大きく立派な教会であった。私たちが来る前、四月三十日からNGOの国際平和会議が行われ、五月一日その閉会総会で、潘基文国連事務総長が来て、演説したという。

やや遅れて会場についたので、コンサートはすでに始まっていた。大聖堂の壇上は、日本のうたごえ合唱団が、百人くらいで歌っていた。たくさん来たんだと感心。「原爆ゆるすまじ」「ヒロシマ」など歌う。そのあと、三人のシンガーソングライターが登場し、歌を披露。きたがわてつさんは、おなじみ「ヒロシマのある国で」。橋本のぶよさんが「平和の誓い」を英語で歌った。もうひとりは、ニューヨークの歌手ディナさん。彼女はジャズ畑の人のようで、ピアノを弾きながら、自身が好きな歌だという、広島の中学生が詩を書き日本全国に広まった「ねがい」をジャズにアレンジして歌った。ゴスペル調で、場の雰囲気にも合い、非常に良かった。その後、「ニューヨーク・レイバー・コーラス（労働者合唱団）」が歌う。労働者と言っても、大部分高齢でリタイアした人と思われた。題名は忘れたが、いかにもアメリカっぽい曲が、なかなか良かった。最後にみんなで、「ウィーシャルオーバーカム」を大合唱。

公開シンポジウムは、日本原水協・高草木さんがコーディネーターで、シンポジストは、エジプト軍縮大使ヒシャム・バドル、米フレンズ奉仕委員会のジョセフ・ガーソン、米ピースアクションのポール・マーティン、英核軍縮キャンペーン（CND）副議長セーラ・カーティンの各氏。高草木さんがパネラーの紹介と基調報告。「CNDは一九五八年から平和行進をしている。日本


かつてキング牧師やマンデラ氏も演説したリバーサイドチャーチでのピースコンサート

でよく見られる、反核ピースマークはＣＮＤのデザイン」と。バドルさんは「ＮＰＴ最終合意文書に（核兵器廃絶条約の交渉開始）を盛り込むよう声明を出した。パレードを見ました。勇気づけられた」とのべ、非同盟運動、新アジェンダ連合にも言及。ガーソンさんは、国際会議への潘基文氏の参加の意味、オバマの核政策の評価など。マーティンさんは、アメリカの平和運動について。カーティンさんは、トライデントミサイル更新について、またＣＮＤの活動についての報告。ここで、昨日の行進にも参加した共産党志位委員長ら三人の国会議員が紹介され、共産党が訪米してからの活動報告をした。

パネラーの発言が終わって、会場からの質疑。こんな広い会場でもやるんだと、原水協の姿勢に感心。いくつかの質問の最後に、高校生の「核抑止に代わる、平和を守るものは何？」との質問が印象に残る。残念ながらパネラーからは、ぴたっとした回答は聞けなかった。自問自答してみる。「それは憲法九条だろう」と、答が浮かんだ。

我々の安全を保障する核兵器の数は”ゼロ“

中川　武夫

「ＮＰＴ再検討会議の成功をめざす反核医師の会のつどい」がニューヨークのＳＥＩＵ支部の三十三階ペントハウスで五月四日午前十時から開催されることになっていた。それに先立って、同支部の講堂（別のビル）で「医療・福祉関係者のつどい」が開催され、時間になるまでこの集会に参加し、反核医師の会のつどいに参加する予定であった。

「医療・福祉関係者のつどい」では、研修医を中心に医師を３万人組織しているというＳＥＩＵ傘下の組合の委員長ルイス氏（黒人女性）からの報告を聞いた。医師の組織は、今までは平和や学術・専門分野に閉じこもりがちで、労働運動や平和、核兵器の問題への取り組みが不十分であったこと、最近ではこの問題へも関心が寄せられるようになり、組合も重視して活動していること、アメリカの医療の実態について、医療費が日本の約二・五倍である年間一人当たり八千ドルがかかっているとのことであった。公的保険がなく、貧富の差が大きいアメリカでの医療は大変な問題があることを改めて実感した。帰国して確認したが、平均寿命は男女とも日本より約五歳短い。

本題の「反核医師の会のつどい」に戻ると、開会時間が近づいたので会場へ急ごうとビルを出ようとすると、反核医師の会代表世話人のお一人の山上先生ご夫妻がお見えになり、「あちらのビルはあかん」とのこと。

反核医師の会のつどいの模様

ビルに行ってみたら雨漏りのため？か、エレベーターから水が噴き出していて、直る見込みがないとのこと。しばらくするとＳＥＩＵの方らしき恰幅の良い女性が現れて、別の会場を準備するから少し待つようにと。結局三十分遅れで「つどい」は始まった。会議のことが事前にどこまで伝わったか明確でなく、何人集まるかが不安であったが、全体で三十人超、医師・歯科医師二十名余の参加であった。

つどいは山上先生の司会で始まり、まずゲストのＩＰＰＮＷ元共同会長で、元全米公衆衛生学会長でもあり、元ＰＳＲ代表でもあるサイデル氏がＩＰＰＮＷとＰＳＲを代表して話をされた。十五年前仙台で開催された「反核医師の会のつどい」で日本を訪問されたことから話が始まり、ＮＰＴ六条は核兵器だけでなく、その他の軍縮の義務についても定めていること、国際司法裁判所が核軍縮に動くべきであるというあの判決後もほとんど進展がないことからも、この再検討会議の重要性が明らかであること、ＮＰＴ再検討会議に向けて日本でたくさんの署名が集められたことは大きな意味を持っていること、保有国から核軍縮の動きは不十分であるが、アメリカではＩＣＡＮが中心となって運動をしていること、今回の再検討会議で大切なことは一九四五年に何が長崎・広島で起きたかを明確に認識し、再び繰り返してはいけないと言うこと、各国代表にその重要性を説得すること・認識させることであるとし、日本の運動と我々の運動が今後も共同して取り組むことが重要であると結ばれた。

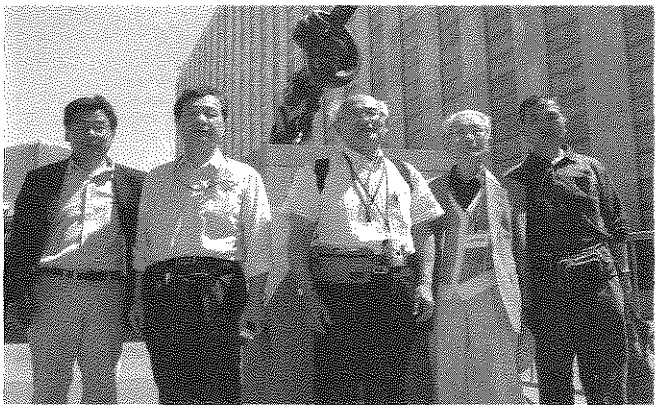
ＰＳＲニューヨーク支部長のキャシー・ファルボさんは、日本の被爆の影響を受けた人、実験場周辺での被曝の影響受けた人が、その実情を各国首脳へ知らしめることが重要であると話された。

ＩＰＰＮＷプログラムディレクターのジョン・ロレッツさんは、五年前広島、長崎を訪問しこの問題の重要性を改めて認識した。このＮＰＴ再検討会議には、ＩＰＰＮＷ関係で十カ国くらいから三十人ほどが参加しているのではないか。今回の会議の目標は二つ、ひとつは核戦争が起きたら地球はどうなるのか

を明らかにすること、もう一つは核兵器の禁止を確立することです。たった一発の爆弾で広島・長崎に深刻な被害をもたらした。数千発が使用されたら、「核の冬」が出現し、生物は死滅する。それを考えると、我々の安全を保証する核兵器の数は〝ゼロ〟なのだ。そこで今、ＩＰＰＮＷは法律家や科学者と協力して「核兵器禁止条約モデル案」を作り、その成立に向けて努力をしている。核廃絶への最大の障害は「核抑止論」である、オバマのプラハ演説は、核廃絶は述べたが一方で抑止力に言及している。これでは核兵器の温存を保証するものでしかない。日本にとって重要なことは、アメリカの拡大抑止論や核の傘に守られると言うことの意味をしっかり考えることである、核の傘は逆に射撃の標的のように攻撃の的になってしまうと言うことである、と話された。

サイデル氏は最後にＳＥＩＵ一一九九支部に伝わる炭鉱労働者の作った詩、組合の歌にもなっているものを披露された。「長い道も一歩一歩、石が落ちてくるが一つ一つはたいしたことはない。組合の下で一つ一つ取り除く。一人一人では何もできない、組合の力で」と。

沖縄の武居先生から、アメリカの一般市民の意識はどうなっているかとの質問には、「広島でどれだけ多くの人が殺されたか知られていない。知らしめることが重要。インド・パキスタンなどの小規模核兵器でも、大きな影響を与えることや核テロのことは、メデイアの影響でもあるが、ある程度は知っている。他は無知で、アメリカは核兵器で守られていると思っている。イランに核を持たせてはいけないと考えているが、自らの核については認識が及んでいない。多くの努力を払って知らせる努力をしている。」と。鳥取の斉藤先生からは核実験による被曝の影響についての質問へは、「風下のユタ州南部まで影響が及んでいるが、被害者数は不明。米癌学会でも、甲状腺癌を影響と認めた。一九八六年には公衆衛生学会が、学会としてデモを行い、逮捕者も出したが、実験の停止や生産の停止へ貢献した。」



国連本部のモニュメント「発射不能の銃」の前にて

徳田先生から、十五年前仙台でサイデルさんにお会いした。お元気で活躍されていることに敬意を表したい。運動の継承は重要な課題で、何とか愛知でもそれができたのではないかと考えているとの発言があった。

続いて、ゲンプロジェクトの浅妻さんの報告、韓国ＮＧＯのキムさんの参加・すばらしいプレゼンがあった。キムさんは、ＮＰＯのピースデポでインターンをし、原爆のことはほとんど知らなかったが、被爆者の話を通訳し涙が出た。大学を卒業し、平和ネットワークで仕事をするなかで、被爆者の十人に一人が韓国人であることなどを知った。韓国では、原爆が日本から韓国を救ったとの認識が強く、反核の運動はなかなか困難。韓国からはＮＹへは二十人くらいが参加している。残念ながら、パン・ギムン国連事務総長の演説へも、韓国メデイアの取材はなかった。韓国へ帰って、また運動に頑張りたい。

大阪の平林先生から、関連して、平和資料館の説明文に日本語と英語はあるが、ハングルと中国語がない、これを改めさせることも必要と発言。

日本共産党の井上哲士議員もお見えになり、あいさつ。日本共産党は志位委員長、笠井亮議員と三人の代表団がアメリカに来ており、志位委員長は核廃絶を決議したバーモント州議会を訪問し知事や議長と懇談をしている。井上さんは被爆二世で、お母さんが広島で被爆されていること、広島平和公園にサダコの像が完成した一九五八年五月一日が誕生日であることなどのエピソードを披露された。

全日本民医連の長瀬事務局長からも発言があり、全国から代表が参加していること、医師も多数ニューヨークへ来ていることが話された。また、ニューヨークで代表団の一人が自転車にぶつかられたが、皆遠巻きにするだけで何もしてくれなかった。たまたま通りかかった日系の方が救急車を手配してくれたが、病院では、帰って様子を見てくれるようにというのみで診察をしてくれない、診察を強く求めると、レントゲンなどの検査は全くなくて、結果として様子を見るようにとの指示で、医療費は三百五十八ドルであったとのエピソードも披露された。

最後に松井事務局長から、内容は濃い集まりでしたが、開始時間の遅れもあり会員の発言時間があまり取れなかったのが残念でした。参加していただいた方、いろいろご協力いただいた方本当にありがとうございました、とのまとめがあり、散会となった。松井先生からのその後の話では、サイデル元会長からは、今後何か困ったことがあれば、いつでも相談にのりますという温かい言葉も頂いているとのことでした。

原水爆禁止二〇一〇世界大会
核兵器のない平和で公正な世界を
原水禁大会・国際会議に参加して

反核医師の会・愛知　事務局長　中川　武夫

八月二日から四日まで国際会議が例年と同じ広島市文化交流会館（旧厚生年金会館）で開催された。名古屋では取りつぶされた厚生年金会館であるが、広島では市の施設として存続されていた。

会議は、日本原水協代表理事である澤田昭二先生の「NPT再検討会議は、核兵器のない世界に向かってさらに一歩前進させる内容の最終文書を採択した。核兵器のない世界を実現するために、私たちが何をなすべきかが一層明確になってきた。①核兵器廃絶条約交渉を迫る、②核の傘から離脱した日本を作る、③被爆の実相を世界へ普及する、ことが必要。」との主催者あいさつで始まった。被団協事務局次長の木戸季市氏は、被爆者のあいさつとして「NPTで一カ月アメリカに滞在し、いくつかの学校や地域で被爆証言をし、被爆者の証言と生き方は私の人生を変えた、若い私たちにできることは何でしょうか、などの感想を受けた。また、今年の再検討会議で最も印象的であったことは市民の運動こそ核兵器廃絶を実現するための力であることが強調されたこと。」と述べられた。潘基文国連事務総長からは、「私自身としても、さらに核兵器廃絶・軍縮の仕事を続けていくつもりです。」とのメッセージが寄せられた。

会議では、多くの発言があったが、私として記憶に残っているものを紹介する。

アフガニスタンの正義を求める社会協会のウィーダ・アハマド女史は、三十年にわたる戦争で非人間的犯罪を犯した戦犯たちが、現在のアフガニスタンを支配し、支援寄付金三百億ドル以上が軍閥と犯罪者のポケットに入ってしまっている、と発言された。アメリカが始めた「テロ防止」の口実のアフガニスタン支配が、何を引き起こしているかがよく理解できた。

フィジーの核実験被ばく復員兵士の会のポール・アーボイ氏は、一九五七年徴兵されたフィジー水兵は、特別な防護服や監視装置を付けず、十二マイル（約二十km）離れた海に爆弾が投下されるのを座って目を閉じて待ち、火傷しそうな熱線を浴び、鼓膜が破れそうな轟音がとどろいた。立ち上がり振り向くと巨大な火球がキノコに姿を変え、太陽を覆い隠し、強風が吹いてきて黒い雨が降ってきたと発言。まるで被爆の人体実験ではないかと耳を疑った。

マーシャルの前上院議員のアンジャイン・マディソン女史は、米内務省は、元住民に対しマジェット島から続くロンゲラップ島に戻れと言ってきたが、依然として放射能値も高く、経済基盤もなく、戻れる状況にはない。しかし、戻らなければ信託金を減額するといわれているとの話があり、耳を疑った。アメリカは、核被害をここでもほとんどないことにするという、非科学的態度を取り続けているのだと思わされた。

全体として、今年のNPTの合意文書の評価と、各国政府の対応、昨年のオバマ演説とそれ以降の動きなどについて客観的に評価し、その背景を明らかにする発言と、合意文書を今後の運動にどう生かしていくかについての発言があった。最終日に、それらを踏まえた「国際宣言」が採択された。

国際宣言は、核兵器廃絶条約の交渉開始を求める潘基文国連事務総長の提案に注目したこと、核抑止論が核兵器のない世界実現の最大の障害であること、被爆国日本が米国の核の傘に依存することは、アジアの平和と安全の実現の重大な障害であること、をうたい、被爆者とともに、そして未来を担う若い世代とともに、いまこそ行動に立ちあがろうと結ばれた。

会議の三日間は、連日の晴天で暑い日であった。ホテルへ戻る途中でお会いした地元の主婦から、「暑いですね」と話しかけられ、本当に暑くて日差しも強いですね」と答えたら、「あの日もこんな天気だったのでしょうね」と返ってきた。広島の方には、あの日がきちんと根付いていることが垣間見られたような気がした。改めて、二度とヒロシマ・ナガサキを繰り返してはならない、さらに一層運動を広めていかなければならないとの思いを強くした広島であった。

原水禁大会・広島に参加して

愛知県保険医協会事務局員　井町　喜宣

原水爆禁止二〇一〇年世界大会・広島」が八月四日から六日まで県立総合体育館を中心に開催された。愛知県保険医協会は、事務局二人を代表派遣した。

オバマ大統領のプラハ演説をきっかけに国際政治が大きく核兵器廃絶に向かう中で、五月にニューヨークで開催された核不拡散条約（NPT）再検討会議では「核兵器のない世界の平和と安全」を達成することを決議した最終文書の確認など大きな成果を上げ、さらに大きな到達点を目指して幕が開かれた。

多彩な世界各地の草の根の運動もさることながら、潘基文国連事務総長、カバクチュランNPT再検討会議議長らのメッセージ、国連軍縮問題担当上級代表のセルジオ・ドゥアルテ氏の発言など国際機関・政府・公的団体の行動が強く印象づけられた大会となった。

大会には政府・国際機関の代表や非政府組織の代表など、二十七カ国、六十九人の海外代表が参加し、開会総会には海外・全国各地から約七千四百人が集まった。

核廃絶への思い全世界から

四日の開会総会では、来賓代表で最初に登壇した、日本被団協の坪井直氏は「網膜がやられ、電灯の光も良くないが、この会のために退院してやってきた」と述べ、二十歳で爆心地から一キロの地点で被爆し、ガンや心臓病などで十二回の入院をくりかえした被爆体験を語り、「それでも生きているのは亡くなった人たちの声を代弁し、核兵器廃絶を見るまで死ぬわけにはいかない」と思いを語った。

秋葉忠利広島市長はNPT再検討会議に平和市長会議として十カ国三十都市から市長を組織して参加したこと、日本原水協からは約千六百人が参加し、七百万筆の署名をカバクチュランNPT議長に届けたことに言及し、そのような様々な人々が核兵器廃絶に向けた熱気を作りだし、今回の成果に結びついたことを強調した。

各地区の草の根の取り組みでは、愛知県平和委員会の小田前恵子氏が、被爆者団体とも連携して県下二千九百人の被爆者への聞き取りを目指す「聞き撮りプロジェクト」の報告をした。「二歳のとき被爆し、被爆者としての意識がなかったが、結婚、出産で偏見にさらされ、娘の結婚式で相手の親族が出席してくれなかった」との聞き取りを紹介した。

多彩な分科会

五日には広島市内など各地で、二十一のフォーラムや分科会が開かれた。憲法九条、米軍基地をテーマとするものから、「岩国・呉基地調査行動」、「被爆電車に乗って・親子で学ぼう」と多彩だ。

そのひとつである「核燃料サイクルと核兵器の廃絶」では日本大学の野口邦和氏が報告。原子力発電の技術のうち、ウラン濃縮工場で濃縮ウランができる。原子炉の使用済み燃料から再処理工場でプルトニウムができる。このような核兵器に転用できる物質の軍事利用を防ぐため国際的な管理が必要であるが、現段階ではプルトニウムを安全に発電に利用する方法がないため、再処理はやめるべきであること。原子力発電を進める日本政府が原子力の軍事利用については、非核三原則を法制化せず、自衛のための核兵器の保有・使用は憲法九条に違反しないとの立場をとり、態度があいまいで非常に不安だと述べた。

核兵器廃絶条約の交渉開始を

六日、閉会総会には約八千人が参加した。

セルジオ・ドゥアルテ氏は「（NPTの）二重基準をなくし、普遍的な核兵器廃絶を追求せねばなりません。それこそが万人に真の平和と安全を保障する持続可能な道です」と述べた。

また、「全戸署名ローラー」に取り組み、区内有権者の半数にもせまる約四万三千筆の署名を集めた大阪西淀川の経験など、各地での草の根の多様な活動が報告された。

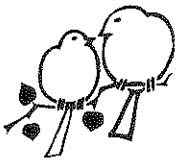
最後に、核兵器廃絶条約の交渉開始を求める声をさらに大きく広げること、アメリカの「核の傘」からの脱却を日本政府にせまることなどを呼びかける決議を採択して幕を閉じた。

菅首相発言に大きな非難

六日の広島市の平和記念式典は、国連事務総長の参列など世界的な注目が集まった。

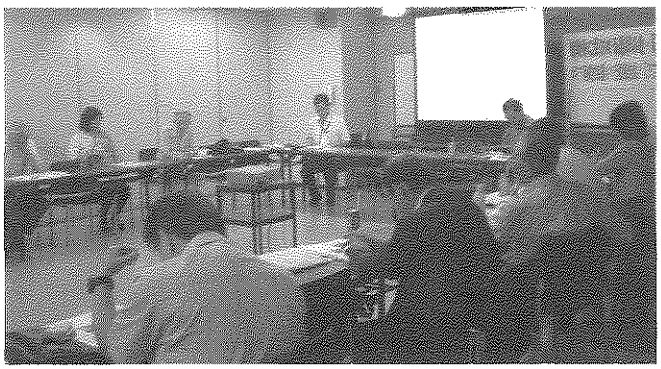
秋葉市長は原水禁大会のあいさつと同様に、政府に対して核の傘からの離脱、非核三原則の法制化を求める発言をした。

菅首相は「唯一の被爆国としての核兵器のない世界実現に向けて行動する道義的責任を有している」としながらも、その後の会見で「核抑止力は必要」と述べ、二枚舌との批判があがっている。



反核医師の会・愛知

総会・DVD上映会・NPTニューヨーク行動報告会を開催



核戦争に反対する医師の会・愛知は六月二十六日（土）の午後、二〇一〇年度の総会と四人の代表派遣を行ったNPT再検討会議ニューヨーク行動の報告会、ペシャワール会の活動を収めたDVD上映会を行い、二十人が参加した。

総会では、講演会の開催、全国の反核医師の会のつどいや国際会議への参加、原爆症認定集団訴訟への支援と訴訟終結に関し報告した。

一〇年度も引き続きこれらに取り組む活動計画を決めた。この他会計報告と世話人体制が確認された。総会に続き五月に開催されたNPT再検討会議の報告会を開き、代表派遣された中川・土井・徳田各氏がニューヨークでの国際行動や現地で開催した医師の会の模様などを報告した。今回の代表派遣にあたり、協会・反核医師の会合わせて、募金は九十二人から五十九万三千円、署名は五千六百八十筆と、今までにない規模の取り組みとなった。

もうひとつの記念企画としてDVD「アフガンに命の水を」の上映会を行い、中村哲医師がペシャワール会代表として干ばつで荒れ果てた荒野を地域住民とともに力を合わせて灌漑用水路の工事を進め、緑の麦畑や菜の花咲く畑地に変えて行く模様を鑑賞した。

また、セイブ・イラクチルドレン名古屋を通じ愛知医大で研修を行ったアブドゥル・アミール医師も参加し、イラクの現状と引き続きの支援を訴えた。

反核医師の会・愛知
代表の堀場英也氏が逝去

核戦争に反対する医師の会・愛知の堀場英也代表は、今年三月から肝臓細胞ガンで闘病を続けられていましたが、DICに移行し、八月六日逝去されました。満八十四歳。一九八二年四月の核戦争に反対する医師の会・愛知の設立に尽力され、設立時から事務局長を務めました。代表の飯島宗一先生が亡くなられた二〇〇四年三月以降、代表に就任し、会の発展に役割を果たしました。

八四年から九九年まで愛知県保険医協会理事長、九〇年から九七年まで保団連会長を歴任され、保険医協会および保団連の運動の中で反核平和運動の発展に献身されました。

さらに、IPPNW国際大会への参加、原水禁世界大会議長、非核の政府を求める会常任世話人を務めるなど、生涯をかけて反核平和運動に身を捧げ、反核平和運動の発展に大きな役割を果たされました。

● 会費納入のお願い ●

二〇一〇年度の会費（五〇〇〇円）の納入をお願いいたします。同封の郵便振込用紙をご利用いただくか、左記の銀行口座あてにお振り込みください。

「核戦争に反対する医師の会」
三菱東京UFJ銀行・八事支店（普）108－297

※不明な点などございましたらお手数ですが、ご連絡お願いします。☎ 052-832-1345